

現代アイスランド語の
vera búinn að + 不定詞構文について

論文

甲斐崎 由典

日本アイスランド学会（編）
『日本アイスランド学会会報』第16号
25～37頁

1997年5月31日発行

現代アイスランド語のvera búinn að +不定詞構文について

甲斐崎 由典

0. はじめに

現代アイスランド語には、vera búinn að と動詞の不定形を組み合わせた、他の現代ゲルマン語諸語には見られない独特¹の構文(以後 b 完了構文と略す)があり、その意味特性については hafa と動詞の過去分詞を組み合わせたゲルマン語に「普通」な完了構文(以後 h 完了構文と略す)と並べて論じられることが多い²。

しかしながら、特にアイスランド語学習者を対象とした場合、b 完了構文は h 完了構文と比べてもっと現在に近い完了を表す、と簡単に説明した後、共起する副詞句によっては両者の意味するところが等しくなることが述べてあったり、また挙げてある例文も実際の場合ではあまりお目にかかりそうもないものであったりして、こういう場合にはこういう事情で是非とも b 完了構文を使うとよい、というような b 完了構文という表現形式の意義を積極的に明らかにしてくれるような説明は少ないようである。

そこで本研究では、同一の語構成の h 完了構文と b 完了構文を比較する今までのやり方によってではなく、b 完了構文がひとつの表現形式として、実際の文章内ではどのような意味合いを出すために使われるものなのかを見ながら、b 完了構文の意味特性を明らかにしてみたい。

¹ 現代フェロー語にも búinn に相当する búgvín を使った類似の構文があるが、意味特性は古アイスランド語と同じく、物事の完了などではなく「～する準備ができています」ことを表すようだ (Jakobsen / Matras (1961) 41 頁)。ただし、現代アイスランド語でも búinn の代わりに alþúinn が使われていたり、vera við því búinn のように við því が入っていると、準備ができています方の意味になる。Magnús (1978) 108 頁を参照。

² アイスランド語では、h 完了構文は完了相 1 (lokið horf I)、b 完了構文は完了相 2 (lokið horf II) と呼ばれる。Jón F. (1989), Jóhannes (1992)を参照。

1. 「直前の完了」か「完了の結果」か

もともと b 完了構文を詳しく扱った研究は少ないので、今までアイスランド語学習者対象にどのような説明が行われてきたかを見るためにも、ここでは b 完了構文について解説を加えているものであれば教科書であっても取り上げた。

b 完了構文について言及した先行研究・解説は、この構文の意味特性をどのように捉えているかによって大きくふたつに分けることができる。

まず大まかに言って b 完了構文は「直前に完了」したことを表す表現形式だとするもので、これは先行研究・解説としては多数派である。

Jakob (1920)は、何かが完了したことを表すために、特に話し言葉において h 完了構文の代わりに b 完了構文が使われることを述べ、そして b 完了構文は特に「今動作が完了したこと」を強調するものであることを、同一の構成語による b 完了構文と h 完了構文の比較により説明している。また b 完了構文が一種の完了構文として使われるようになったのは少なくとも 17 世紀以降であることも述べている³(182 頁～184 頁)。

Valtýr (1922)は特に話し言葉において h 完了構文の代わりに使われる構文として、本文ではなく傍注の中で簡単に b 完了構文に触れている。

Stefán (1949)は、b 完了構文は「完結した動作」を表すと述べた後、持続状態を表す動詞の場合は持続時間が示されていることが必要であることや、持続時間のはっきりしない心理状態を表す動詞とは組み合わせることができないこと、また動作の開始や終了を表す動詞と組み合わせられることが少ないことなど、組み合わせることのできる動詞の種類についても言及している(146 頁～147 頁)。

Jón F. (1978)は b 完了構文を、不定形になっている動詞が表す過程や動作が「既に完了」していることを表すための表現形式であると定義し、物事の開始を表す動詞と使われることは少なく、また h 完了構文との意味特性の違いとしては、h

³ 後出の森田(1981)や Gudbrand (1957)も含め(87 頁)、複数の研究者が一種の完了形としての b 完了構文の用法が古アイスランド語には見られなかったことを述べている。なお、Jón F. (1989)に拠れば、b 完了構文の意味を通時的に研究したものに

Mörður Árnason (1977) *Búinn er nú að stríða. Óprentuð B.A.-ritgerð í íslensku, Háskóla Íslands. Reykjavík.* があるようだ。

完了構文の方が b 完了構文よりも記述対象が一般的で、b 完了構文の方は時間的に離れていない特定の出来事を記述対象とする、と説明している(48 頁、81 頁)。

Magnús (1978) は「動作の完了」を表すために b 完了構文が使われると述べ、また運動を表す動詞(の不定形や名詞)と組み合わせられた場合は、稀な用法ではあるが準備ができていることを表すこともあるとしている(107 頁～108 頁)。

森田(1981)は、古アイスランド語にはなかった用法として、動作の完了を表す h 完了構文と並んで、b 完了構文が特に「今しがた完了」したことを表すことを説明している(151 頁～152 頁、156 頁～157 頁)。

Kristján (1983)は、現代アイスランド語のふたつの完了相として h 完了構文と b 完了構文を挙げ、b 完了構文の方が h 完了構文よりも「さらに現在に近い完了」を表すと述べている(48 頁～49 頁、52 頁)。

Jón H. J. (1984)は、定形が現在時制の場合に限った上での b 完了構文と h 完了構文の違いとして、まず進行する動作を表す動詞と組み合わせた場合は、h 完了構文はその動作がかなり前に完了していてもよいのに対して b 完了構文ではその動作は「発話時点でちょうど完了」している必要がある一方、動作の行われた回数が示されていればどちらの構文も等価になること、また短い間での変化を表す動詞の場合はその変化の生じた回数、持続状態を表す動詞の場合は持続時間がそれぞれ示されていないと b 完了構文にすることはできないのに対し、h 完了構文ではそのような制限がないことを述べている(66 頁～67 頁)。

Ásta / Margrét (1988)は、ふたつの完了構文を比較して、h 完了構文はどれぐらい前に完了したかは問題としないのに対して、b 完了構文では「少し前に完了」したことを表し、また状態や短い間での変化を表す動詞は b 完了構文にはあまり使われないことを述べている。さらに、b 完了構文は少し前に完了したことを表すので動詞の目的語は定形であることが多いことに言及している(81 頁、106 頁～107 頁、183 頁)。

Jón F. (1989)は、実際には書名よりも広範囲に、現代アイスランド語の動詞と動詞の様々な形を利用した構文についての研究であり、b 完了構文についても比較的多くの紙面をさいて述べている。まず、b 完了構文は主に「ある特定の出来事が完了したばかり」であることを表す表現形式であると定義した後、b 完了構文の特徴として、(1) h 完了構文で使われる時の副詞が大抵使える他、さらに「少し前」を表す時の副詞が使えること、(2)原則として主語は生き物で、動作主の意味的役割を果たすものであること、(3)前項の帰結として主語の意味的役割が被動

作主であるような受動形は組み合わせることができないこと、(4)変化を伴わない一定の動作を表す動詞や心身状態を表す動詞は、持続時間が示されていないと使えないこと、(5)目的語は定形であることが多いこと、(6) að は不定詞が省略されると前置詞のように格支配を示す⁴こと、の6点を挙げているが、b完了構文とh完了構文の意味特性の違いについては、上記(2),(3),(4),(5)に注目することが重要であり、またb完了構文が「特定で間近」な完了でh完了構文が「一般的で離れた」完了を表すと言えるが、実際には話し手が自由に決められる相対的な尺度が関わってきて、いつもはっきりしているわけではないと述べている(103頁～107頁)。他には、話し言葉でしか使わないものや非常に稀なものもあると断った上でb完了構文をさらに他の構文と組み合わせたものとして、*hafa verið búinn að gera*, *vera búinn að vera að gera*, *vera að verða búinn að gera*, *fara að verða búinn að gera*, *vera að fara að verða búinn að gera* を取り上げ、それぞれの意味特性を例文を上げながら説明している(118頁～123頁、99頁～100頁)。

Bartoszek/Tran (1992)は動詞構文のひとつとしてb完了構文を挙げ、意味特性としてはある動作を終えたこと、なにかを「為し終えた」ことを表すと簡単に述べている(69頁)。

次に、以上の研究・解説と異なり、b完了構文に「完了の結果」を表現する機能があることを述べているものを見てみよう。

Jakub (1970) は、b完了構文とh完了構文の意味特性の違いを主題とする単発研究としては最初のものであろう。Jakub はb完了構文とh完了構文が場合により全く等価になったり微妙な意味合いの差を示す様子を解明するために、まず定形が現在時制か過去時制か⁵、そしてさらに組み合わせられている動詞が出来事を表すものか状態を表すものか、という区別を基準にして、今回取り上げた先行研究・解説の中では唯一、文学作品や新聞から採った事例に従い細かく分析している。その結果として、まずb完了構文は定形が現在時制なら発話時点、定形が過去時制なら過去のある時点のほんの少し前に、出来事を表す動詞の場合は何らか

⁴ この第6点に関しては次のような例文(具体的には後半の文)が挙げられているが、これは構文としては別物として扱うべきであろう。

Ertu búinn að láta skoða bílinn? - Já, ég er búinn að því.

⁵ Magnús (1978)も指摘しているが(185頁)、このように分けたのは実はb完了構文は定形が現在時制と過去時制の場合しかない、という誤解に基づくものである。

の結果達成による動作の完結、状態を表す動詞の場合はずっと続いてきた状態をひとまとめに切り出して考えた上でのその完結を、表す表現形式であるとした。そして b 完了構文と h 完了構文の違いとしては、b 完了構文では動作とその結果の両者が問題となるのに対して、h 完了構文では両者の区別は重要ではないこと、さらに定形が過去時制の場合は、h 完了構文は b 完了構文と異なり、過去のある時点のほんの少し前ではなくその時点での完結を表現するためにも使えることを指摘している。

Kress (1982)は、b 完了構文と vera と自動詞の過去分詞を組み合わせる構文のふたつを、話し手がある過程の完了だけでなく、その結果として出来た状態も問題にしたいときに使う「結果状況構文」と分類し、さらにこの結果状況構文はある時点の後の状態を新しい、たった今現れたものとして、その時点の前の状態から際立たせる機能があると分析している。そして b 完了構文について個別的に述べた部分では、この構文が「過程の完了とその結果出来る状態」を表すことを、同一の語構成の b 完了構文と h 完了構文をいくつか挙げて説明している。また、持続期間が示されていないと状態を表す動詞とは組み合わせられないことも併せて述べている(152 頁 ~ 156 頁)。

Jóhannes (1992)は Jakub (1970)と同じく、b 完了構文と h 完了構文の意味特性の違いを主に扱った最新の単発研究である⁶。Jóhannes はまず McCawley の挙げた現代英語での完了形の 4 つの用法から継続的用法、経験的用法、結果的用法の 3 つを選び出し(4 番目の「最新ニュース用法」は結果的用法に含まれるものとした)⁷、完了構文が表現する意味特性として採用し、また今度は完了構文に組み合わせられる動詞として出来事を表す動詞と状態を表す動詞の 2 種類を選び、完了構文に組み込まれた場合の用法の可能性として、出来事を表す動詞の場合は経験的用法と結果的用法、状態を表す動詞の場合は経験的用法と継続的用法があるとした。以上の準備の上で、Jóhannes は同一の語構成の b 完了構文と h 完了構文を並べて分

⁶ ただし、Jóhannes は Jakub (1970) を参照していない。

⁷ Jóhannes で挙げられているそれぞれの用法の英語の例文は次の通り(130 頁)。

I've known Max since 1960. (継続的用法)

I have read "Principia Mathematica" five times. (経験的用法)

I can't come to your party tonight - I've caught the flu. (結果的用法)

Malcolm X has just been assassinated. (最新ニュース用法)

析して、次の表⁸のような結果を得た。

表 1：現代アイスランド語のふたつの完了構文の可能な用法

完了構文の種類	動詞の種類	継続的用法	経験的用法	結果的用法
h完了	出来事			
	状態			
b完了	出来事			
	状態			

この結果から h 完了構文では 3 つの用法全てが可能なのに対し、b 完了構文では経験的用法を除く結果的用法と継続的用法の 2 つだけが可能であることがわかる。これについて Jóhannes は、結果的用法と継続的用法というのは経験的用法と異なり、出来事の完了の結果としての状態か、もともと動詞そのものが表している状態かの違いはあるにせよ、ある状態が過去のある時点から現在まで絶えることなく続いていることを表すという共通点があると述べ、b 完了構文の意味特性を特徴づけるものとして考えているようだ。

2．実際の文章中での b 完了構文の使われ方の調査

前節で、現在までに b 完了構文に多少なりとも言及した研究・解説はその見解に従って大きくふたつに分けることができることは既に述べたが、他にほとんど全ての研究・解説に共通することとして、筆者は用例の貧弱さ・わざとらしさを挙げるができると思う。もちろん、例えば教科書であれば敢えて構成語数の少ない用例や、類似の構文による少し強引な用例を並べたりして核心点を際立たせたりする必要があることはもちろんであるが。

そもそも、ある言語のネイティブスピーカーが普段何気なく普通におしゃべりするときには、いちいち文法の教科書では似たもの同士として並べて書いてあるかも知れない他の表現形式のことなど(少なくとも意識的には)全然考えずに文を羅列していると考えられる。それならば、お決まりの人工的な用例による分析で

⁸ 表自体は筆者が作成した。ここで はその用法が可能であり、 はある程度の制約はあるが不可能ではないことを示す。

ある程度明らかにされてきたと思われることを、今度はそのような自然な流れの中からもすくい上げて再検証してみることも必要ではないだろうか。

このような考えから、本研究では、1 次文献の項に挙げた現代アイスランド語で書かれた翻訳書ではない本 8 冊から、b 完了構文 150 の全用例について、前後の文脈も見ながらどのようなことを表現するためにこの構文が使われているか調査してみた。これとて、本の著者は言葉を吟味しながら書いたであろうことから、上で言葉の自然な流れとして挙げた何気ない普段のおしゃべりとはずいぶん異質のものと言えるかも知れないが、少なくとも b 完了構文の用法調査を念頭に書かれたものではないはずなので、不適當な調査対象ではないと考えている。

調査は基本的に Jóhannes (1992)の分析を検証する、という形で進めることにして、調査項目は、まず出来事の完了結果が文章の流れとして問題となっているか、すなわち結果的用法であるか、あるいは完了したかどうかと言うよりはある状態が現在まで続いていることを問題とする継続的用法であるかどうかという点と、組み合わせられて使われている動詞の種類⁹である。またそれとは別に、先行研究・解説の多くが言及していた、動作の完了が発話直前であるかが問題となっているかについても注意してみた。

3 . 調査結果

本研究で行ったような調査は、前後の文脈まで含めたそれぞれの文の微妙な解釈が問題となるので、本来ならば必要な前後の文を含めた全用例と、筆者の解釈としての日本語訳を全て掲げるべきであるが、ここでは紙面の都合により、ごく一部の用例のみを紹介するにとどめておく。

まず結果的用法と判断したものには、出来事の完了の結果出来る状態が問題となっている次のようなもの

(1) Ragnar hefur unnið sem gæslumaður inni á Kleppi og oft komið í kaffi eftir

⁹ Stefán (1949), Jón H. J. (1984)などでは、稀な例として回数表示を伴った短い間の変化を表す動詞による b 完了構文について言及されているが、今回の調査ではこの種の動詞による用例は見つからなかったため、動詞の種類と言っても、結局 Jóhannes (1992)と同じく出来事を表す動詞と状態を表す動詞の 2 種類の区別にとどまった。

vaktir, en nú er **búið** að reka hann; það verða ekki fleiri vaktir. (Einar 69)

ラグナルはクレップル精神病院で警備員として働いていて、よく交代の後で家にコーヒーを飲みに来ていたのだが、今はもう首になってしまった。もう警備はないのだ。

- (2) Pabbi hefur áreiðanlega verið **bú inn** að innræta mér talsverða nízkú, því mér fannst það óþarfi að fara að eyða stórfé í þetta glæsilega hótél þar sem verðlagið var miklu hærra en tíðkaðist á öðrum hótélum¹⁰. (Jón P. 33)

父は私をずいぶんとけちな人間に仕立て上げたようだ。それが証拠に、私には他のホテルで常識となっているよりもずっと高い料金設定のその豪華ホテルで大金を使い始めることが無用のことに思えたのだ。

の他に、新たに出現する状態は問題とせず、出来事が完了していること自体を一種の結果としての状態として捉えている、次のような例も含めた。

- (3) Axel gaf Heiðu mola af brenndum Bismark þegar hún var **bú in** að burstu tennurnar, beið í herbergi sínu meðan hún var að sofna, gekk síðan út í nóttina, áleiðis niður á tangann. (Gyrðir 28)

アクセルはヘイザが歯を磨き終わってから焼いたボンボンをいくつかあげて、ヘイザが眠ってしまうのを自分の部屋で待った。それから夜の中突端の方へ向けて歩いていった。

また継続的用法には、継続期間がはっきり示されている

- (4) Litli báturinn í naustinu orðinn gisinn og fúinn, **bú inn** að standa þarna inni yfirbreiddur strigabrigði árum saman, hafði aldrei verið sjósettur. (Gyrðir 16)

ボート小屋のそのボートは、穴もあいて木も腐り、ズックのシートを被せたまま何年も小屋の中に立ててあったが、一度も水に浮かべられたことはなかった。

- (5) Hann var þá þegar **bú inn** að vera í pólitísku starfi um allmörg ár án nokkurs árangurs, kominn yfir fertugt og enn ekki kominn á þing. (Þórarinn 72)

当時彼は既に何年も政治の場で仕事をしてきていたが、何の成果も上げられず、四十路も過ぎ、未だに国会当選も果たせていなかった。

などのような用例の他に、継続期間は示されていないが、やはり動作の完了やそ

¹⁰ ここでの h 完了構文はこの文の意味内容が話し手の推測であることを表すためのものであり、「完了」などの時間的な相対関係を表すわけではない。Jón F. (1989)118 頁 ~ 119 頁を参照。

の結果ではなく、ずっとある状態が続いたことを問題としている次のような例も含めた。

(6) Þetta er **búið** að vera ágætt, sagði Bjarni einhverntíma á leiðinni, en alltaf er nú samt best að komast heim. (Þórarinn 99)

「いやあよかったねえ、でもいつものことだけどやっぱり家に帰れるってのが最高だね。」とビャルトゥニは途中で言った。

このようにして用例を分類した結果は次の表の通りである。

表 2：各用例の比率と組み合わされている動詞の分布

用法	全動詞		出来事を表す動詞		状態を表す動詞	
	用例数	百分率	用例数	百分率	用例数	百分率
結果的	126	83.3%	124	93.2%	2	11.8%
継続的	17	12.0%	4	3.0%	13	76.5%
その他	7	4.7%	5	6.7%	2	11.8%
計	150	100.0%	133	100.0%	17	100.0%

ここで、結果的用法にも継続的用法にも分類できずに「その他」の項目にひっくるめたものは、

(7) Böðullinn lyftir tönginni og snýr sér við undrandi. Hann er næstum **bú inn** að reka glóandi tólið í sýslumanninn. (Njörður 123)

驚いた斬首刑吏はやっとこを上にして振り向いて、危うく裁判官に真っ赤になった工具をぶつけてしまいそうになった。

のように *næstum* の入ったものが 3 例と、

(8) Ég sat og neri saman höndum og hafði gleymt mér eitt andartak, en Rögnvaldur gekk upp að skrifborðinu og horfði á myndina sem ég var **bú inn** að vera að mála á vegginn öðru hverju þennan mánuðinn. (Einar 137)

僕はいい気分で座っていて、一瞬うとうとしたりしていたのだが、レグンバルドゥルは机の方へ行って、僕がその月折に触れて壁に描いていた絵を見つめていた。

のように b 完了構文と *vera að gera* の組合わさったもの¹¹が 2 例と、経験的用法で

¹¹ この構文は Jón F. (1989)に拠れば「たった今完了した継続的動作を表す」と説明されている(119 頁～120 頁)が、今回の調査で見付けられた用例の少なさもあり、筆者としてはまだこの構文につ

はないかと思えるような次のような用例 2 例の合計 7 例である。

(9) Hún sá síðan um að Guðný háttaði niður í rúm og fór að spyrja um hvort hún hefði verki. Guðný var ekki alveg viss, - jú, ég er **búin** að fá tvisvar eða þrisvar smá verk, eins og kveisusting. (Jón P. 47)

それから彼女はグズニーがベッドに横になるのを手伝って、痛みがあるかどうか聞き始めた。グズニーははっきり覚えているわけではなかったが、「ああそういえば軽い痛みが二三回。内蔵に炎症があるときみたいなのがあったわ。」

以上の結果を先の表 1 と同じような形式¹²にまとめると次のようになる。

表 3：実例から観察されたb完了構文の用法

完了構文の種類	動詞の種類	継続的用法	経験的用法	結果的用法
h完了	出来事			
	状態			
b完了	出来事		?	
	状態			

すなわち、現代アイスランド語の b 完了構文では、動詞が出来事を表すものであれば、そこでは 9 割方その出来事が完了した結果として出来る状態を問題にしており、動詞が状態を表すものであれば、そこでは 8 割方その状態が過去のある時点から現在までも続いていることを問題にしている、と言えそうである。

また、そもそも b 完了構文が上に述べたように出来事の完了結果や状態を表現の中心に据える表現形式であるとすれば実は当然の帰結とも言える、b 完了構文が出来事や状態の「直前の完了」を表現することが主目的でないことは実例からも読みとれたように思う。上に挙げたいくつかの例文の場合でも、例えば(3)の場合、アクセルはヘイザが歯を磨いたら「すぐに」ボンポンをあげたかも知れないが、前後関係から言ってここでは歯を磨くこととお菓子をあげることの順序が問題になっているのであって、そのふたつの出来事の間 flowed 時間の短さが問題でないことは明らかであろう。しかしながらこのように結論してしまうと、ネイティブスピーカーである研究者によるものも含めた今までの多くの先行研究・解

いては見解保留としたい。

¹² ここでは前出の表 2 に従い用例数の多い順に 、 、 を付した。

説では、今までなぜ「直前の完了」ばかりが注目されてきたのかが問題となるが、これは b 完了構文が、かなり前に完了したことも表現できる h 完了構文と異なり、まだ発話時点で目の当たりにできる結果・状態を前面に押し出すため、その「生々しさ」故に直前の完了という考え方が生まれ、受け入れられてきてしまったためと考えられないだろうか。

また、今回「その他」の用法としてひとまとめにしてしまったものについてであるが、例えば næstum の入ったものは「危うく～しそうになる」という決まりきった構文として登録できそうであり、他にも経験的用法の可能性ありという用例もあったわけだが、いずれにせよ今後さらに用例数を増やして検討していくことが必要と思われる。

4. まとめ

現代アイスランド語に特有の b 完了構文の用法を実例から分析した結果、動詞が出来事を表す場合はその出来事の完了結果としての状態、動詞が状態を表す場合はその状態そのものが、前面に押し出される表現形式であることが明らかになり、また従来言われていた直前の完了という意味合いは付随的なものであることがわかった。

1 次文献

Bjarni V. Bergmann / Guðjón Ingi Eiríksson (1992) Grín er gott mál. (Örn og Örlygur).

Einar Már Guðmundsson (1993) Englar alheimsins. Reykjavík.

Gyrðir Elíasson (1991²) Bréfbátarigningin. Reykjavík.

Jón Birgir Pétursson (1979) Vitnið sem hvarf. (Örn og Örlygur).

Njörður P. Njarðvík (1982) Dauðamenn. Reykjavík.

Steingrímur Matthíasson (1939) Frá Japan og Kína. Akureyri.

Steinar Sigurjónsson (1991) Kjallarinn. Reykjavík.

Pórarinn Eldjárn (1992) Ó fyrir framan. Reykjavík.

2 次文献

- Árni Böðvarsson (ritstj.) (1983²) *Íslensk orðabók*. Reykjavík.
- Ásta Svavarsdóttir / Margrét Jónsdóttir (1988) *Íslenska fyrir útlendinga. Kennslubók í málfræði*. Reykjavík.
- Bartoszek, Stanislaw / Tran, Anh-Dao (1992²) *Icelandic for beginners*. Reykjavík.
- Fries, Ingegerd (1976) *Lärobok i nutida isländska*. Stockholm.
- Gudbrand Vigfusson (1957²) *Icelandic-English dictionary*. Oxford.
- Halldór Ármann Sigurðsson (1989) *Verbal syntax and case in Icelandic. In a comparative GB approach*. Lund.
- Henriksen, Jeffrei (1983) *Kursus i færøsk*. Tórshavn.
- Hreinn Benediktsson (1976) Ísl. vera að + nafnh.: Aldur og uppruni. *Nordiska studier i filologi och lingvistik. Festskrift tillägnad Gösta Holm på 60-årsdagen den 8. juli 1967*: 25-47. Lund.
- Höskuldur Þráinsson (1995) *Handbók um málfræði*. Reykjavík.
- Jakob Jóh. Smári (1920) *Íslensk setningafræði*. Rit um íslenska málfræði 3. Reykjavík.
- Jacobsen, M. A. / Matras, Chr. (1961²) *Føroysk-donsk orðabók*. Tórshavn.
- Jakub, Vladimir (1970) Om to perfektiviske konstruksjoner i moderne islandsk. *Arkiv för nordisk filologi* 85: 163-179.
- Jóhannes Gísli Jónsson (1992) The two perfects of Icelandic. *Íslenskt mál* 14: 129-145.
- Jón Friðjónsson (1989) *Samsettar myndir sagna*. Reykjavík.
- (1978) *A course in Modern Icelandic*. Reykjavík.
- Jón Hilmar Jónsson (1984) *Ísländsk grammatikk for utlendinger*. Reykjavík.
- Kress, Bruno (1982) *Isländische Grammatik*. Leipzig.
- Kristján Árnason (1983²) *Íslensk málfræði. Kennslubók handa framhaldsskólum*. Reykjavík.
- Lockwood, W. B. (1977) *An introduction to Modern Faroese*. Tórshavn.
- Magnús Pétursson (1978) *Isländisch*. Hamburg.
- Margrét Pálsdóttir (1994) *Talað mál*. Reykjavík.
- Sigfús Blöndal (1920-1924) *Íslensk-dönsk orðabók*. Reykjavík.
- Stefán Einarsson (1949²) *Icelandic: grammar, texts, glossary*. Baltimore.
- Valtýr Guðmundsson (1922) *Ísländsk grammatik. Ísländsk nutidssprog*. København.

- 櫻井 健 (1996) 「古アイスランド語の小辞 of の機能とゲルマン語の時制について」 『日本アイスランド学会会報』 15: 24-38.
- 森田 貞雄 (1981) 『アイスランド語文法』 東京.